

## 二、

中国社会学がいま何をやっているのかは、次の四つの言葉で概括できる。「現実に立脚する」、「伝統を高揚する」、「海外に学ぶ」、「特色を創造する」の四つである。

「現実に立脚する」とは、中国の社会学は現実の中国社会を自分の立脚点、出発点とする独特な社会学視角と方法を用いて、中国社会で生じている変化を反映させ、描述と分析を行っていることを意味している。過去に生じた変化、それと関係していることを回顧し、総括することによって、将来発生することを予測しようとしている。特に次の世紀初で生じる変化について予測しようとしている。とりあえずここでは問題を提起し、後程詳しく説明する。

「伝統を高揚する」とは、中国の社会学は何千年の歴史的豊富な社会思想を吸収することを重視してりう。とくに乱を治め、衰を興す社会思想に関して、このような観点によって現実の中国社会を観察する。中国の社会学界と歴史学界では、社会思想史と社会通史の研究を重視している。現在、いくつかの中国社会思想史の著作が出版され、その中の一冊に天津南開大学王旭輝教授主編のものがある。このほかの大学や社会科学学院もこのような本を編集した。とくに歴史家龔書鐸教授が主編した8巻巨著『中国社会通史』は1997年に出版された。龔書鐸教授はこの本の前言のなかで、非常に謙虚で私の社会運営論の観点を吸収したことを書いている。社会運営の類型の観念について、長文にわたって論述した。

「海外に学ぶ」とは、中国社会学界は海外の研究に気を配り、ヨーロッパ、アメリカや日本などの理論と方法を取り入れている。古典のマックス・ウェーバー、デュルケムやマルクスの以外に、最近の総合研究志向の代表者、たとえばイギリスのギデンズ、ドイツのハーバーマス、フランスのフーコー、アメリカのアレクサンダーなどの理論も参考にしながら取り入れている。中国社会科学

院社会学研究所が『国外社会学』という学術誌を刊行し、国内研究者の研究成果を発表している。海外の社会学について、現在の中国は、80年代初期のような紹介のみではなく、注目を集める先端研究のテーマを取り込んでいる。私が教えていた博士課程の院生の一人の博士論文は、『ギデンズの社会理論における時一空分析法』というテーマである。

日本社会学について、いま、私はちょうど日本に来ていたので、ここで少し説明したい。中国社会学界は日本社会学を非常に重視している。“社会学”という名称は、私の知っている範囲で、日本社会学者が SOCIOLOGY を訳したことばである。章太炎は1902年翻訳出版した岸本能武大著『社会学』という本の中で、この名称を継承した。はじめて中国に西洋社会学を紹介した嚴復はスペンサーの『社会学研究』を『群学肄言』と翻訳した。この点について、私は『中国大百科全書社会学巻』の巻頭論文で紹介している<sup>2)</sup>。『中国大百科全書社会学巻』の中では、“日本社会学”の検索項目もある。その中で、34名の日本社会学者について紹介している。たとえば、日本社会学に大きな貢献をもたらした初期の高田保馬、戸田貞三、その後の福武直である。しかし、『中国大百科全書社会学巻』は6年前に出版されたものなので、今の視点から見れば、もっと紹介すべき日本社会学者が、またたくさんいると思う。次の改訂版のとき、この点は改善されるだろう。このほか、中国語に翻訳された日本社会学者の著書もある。たとえば、富永健一の『経済社会学』<sup>3)</sup>、『社会構造と社会—近代化の理論』<sup>4)</sup>である。中国と学术交流を続けてきた日本社会学者は、たとえば貴校の遠藤惣一教授、高坂健次教授および日中社会学会の皆様、たとえば青井和夫教授である。また、東京大学の庄司興吉（『転換期の社会理論』1985）は中国の社会学界に知られている。立命館大学の図書館で文献検索をして見たら、日本社会学の文献量は非常に豊富であるという印象があった。日中社会学術交流の大きな障害はことばである。日中両国の社会学者は、お互いのことばを分かる人が非常に

2) 原注③：『中国大百科全書社会学巻』中国大百科全書出版社1991.12

3) 訳者注：富永健一編著『経済社会学』東京大学出版会1974

4) 訳者注：日本語原書との確認ができていない。中国語翻訳書名は『社会結構と社会—現代化的理論』である。